繪本西遊記

初編

十

へ遠21
2500
40-10

號 2300
40-10

凡士農工商とも夫々の職分家業は固て抽開の器物を造り
今日を営む事世界一般に然り近世写本の巻中に柳に白鷺
のきゝの書入又は秋さ覚束なきの木偶人或は見苦き
男女の陰部等を画き君臣父子の中々面を赤め合事
間々多し是畢竟一時の興より発して戯画の作絵
其職分は道異へ比付の小俳諧より著述拙く筆者の作
なるも只言語と異なる其間ちを知見者中の戯画
池田屋常に是を欲て然へ主源氏物語の用て素紙にて備君子所ふるの爾

麿石山人識

和漢 貸本所 東京牛込細工町 誠光堂 池田屋清吉

池田文庫

繪本西遊記初編巻之十

孫行者三島求方　観世音甘泉活樹

孫行者ハ觔斗雲に打乗り東洋大海中蓬莱山に至り福
禄寿の三星に逢く樹を活をと方を尋るとても禽獸たゝひ丈
しの霊薬にく活をべきれども人参樹を活べき方なゝと
答く是に依く行者身をかゝして方丈に往て東華帝君に
見へ瀛州に至りて九老をたづゝ木を活をの方を問へども
も仙樹を医をべき茶は行者遂に南海に赴き観世音に
見へく事の子細を物語に菩薩宜し也入て宜く是菩
安き事なり吾此瓶に入れ甘露水仙樹を活をるに

観音
大士
活人
参樹
沙悟浄
悟空
八戒

観音

ちゝ驗あり向に太上老君我と賭して揚子時式揚柳と棄入
丹爐の中へふ〳〵と焦〳〵たり吾其柳とりて瓶中にこゝへれ甘
露水にひたしるに忽生活して今に青くたり是とりてふりか
にん參樹と活さんと何のかゝれ事ならん行者大きに歎こび直
觀音の所供して五莊觀に立ゆる大仙をはじめ三藏八戒は悟
者大仙に向ひてやるい吾南海に往く菩薩をたのゝまつて也
かの人參樹を活さんとはもやく用意とは思ふと云大仙則仙徒
仙童に命し後園ときこゆる菩薩とゝ人參園にゆれま
みゝ其人皆く後に引そひ入ゝ菩薩近く行者とま
ねき涙がゝの心よ起死回生の符と畫き瓶中の甘露を以て

法丁

ちゝ驗あり向に太上老君我と賭して揚ゝ吶揚柳と棄入
丹爐の中へおし入く焦したり吾其柳をとりて瓶中にこゝへれ甘
露水にひたしるに忽生活して今に青くたり是をとりてふりゝ
に人參樹と活さんと何のかゝ事にはらん行者大きに怒こゝ直
觀音の所供して五莊觀に立ゆる大仙をはじめ三藏八戒悟
淨菩薩の者ゝ多くゝ一齊に出迎謹て礼をなす行
者大仙に向ひてやるゝ吾南海に往く菩薩をたのゝまつる也
かの人參樹を活さんとゝたゝやく用意をはるゝと云大仙則仙徒
仙童に命し後園ときこゝる菩薩をとゝ人參園にゝれま
ゝ其人皆く後にゝそひゝ菩薩ゝく行者とま
ねき渠がゝの心を起死回生の符と畫き瓶中の甘露を以て

菩薩も南海に回りぬ大仙は孫行者と兄弟の約をなして
五六日滞留し三藏師弟逐に大仙に別を告げ西に向ひ
去出る

尸魔三戯唐長老　聖僧恨逐美猴王

玄奘三藏は五莊觀にて人參果を吃ひてより忽仙骨生じ
神変にして高山に登り幸手他とあるむげどに時に三藏行者に
向ひて曰く我今飢に苦しく進まが已に你いつまでも往てば
の齊飯をもとめ来る行者是を領して雲に乗りて南の
方へ去りにより変に一個の妖怪あり身変して容儀妖艶の
美女と化しまに緑碗の器をとり前面より西に来りて三藏を

向ひて申さるは此山は白虎嶺と申して禁に我家あり近き所に
父母を已まの亡者のために一鉢の齊飯を供養せんとて長老
是をうけ給へや三藏よろこんでかの器をとりて既に吃ひんとし
る所に空中より大音に呼はりて曰く師父其食吃ひ給事
なかれ三藏驚て是を捨れば孫行者一系に下りまり金箍棒
を打振りてかの美女を只一打に打殺したり原来は妖怪解尸
の法を使ひ本身は空中に在て女屍をとりて変に居置孫
行者にうとせりは三藏大きに怒りて你故なくかの美人を
打殺せは何事ぞや行者曰く師父あやしきを知れは
女子原来妖怪なり女の屍を以て身を解吾徒捧をのがれ
たれとも器の中の齊飯を見て其妖怪をとりあつとこの三藏

三蔵
悟空
沙悟淨
八戒

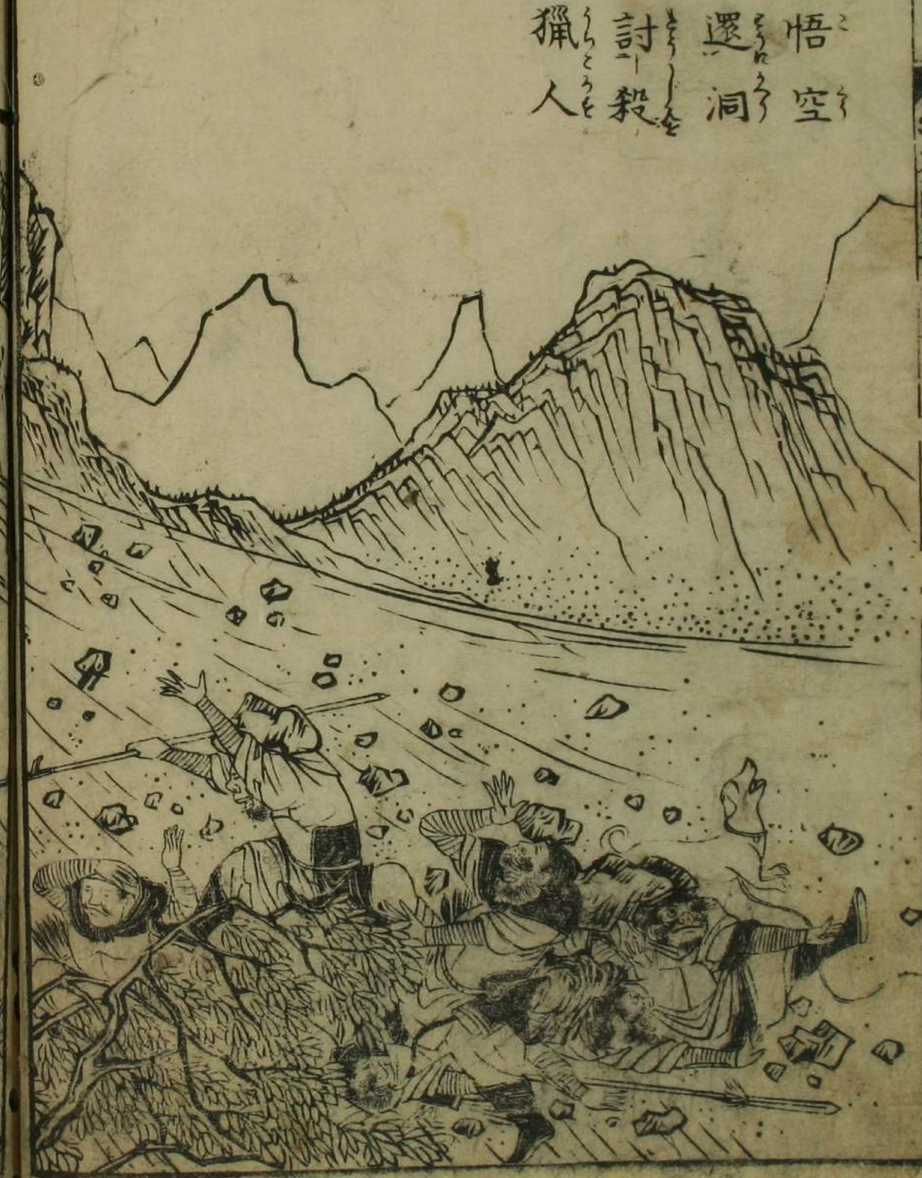
悟空
答殺
女與
爺婆

再び驚き磁器を投くるに癩蝦蟆長尾蛆の類蠢めく
此時八戒行者らうろいしきを女を打殺したるとて心に怒を恨み
進み出て三藏に告て曰く行者元来人を殺すを好むこの
女は是怪にあらず正しく農家の女なり器の中に蟲蛆を入るも
全く行者が法術にて師父の目をくらまんのみなり三藏両徒弟
の言を聞て疑に決しかねて躊躇してとゞまるこの時
空中にいろ〳〵の妖怪再び身を変じて八十余りの老婆となり
三藏の前にあゆみ来る行者目を定て此老婆を見て是もまた
人にあらずして妖怪なり行者怒て你妖精再び来る吾師父
を戯るゝやとて終らず鐵棒を挙て忽老婆を打殺せり妖怪
まと解尸の法をほどこい身を脱して老女の屍を取て倒し置き

三藏おどろきまどいていろ〳〵こみくる行者を責て宜ひなるか你ぢ
何ぞ人を殺すかくのごとく甚しきや八戒やうく進んで曰く此老
婆は果して先の女の母なるべし行者罪なきを殺してためし
むは原来行者の生質なり行者是を守て怒て曰く你獣子猥
りに言を發すること勿れ向の女は年紀ようやく十七八今の老婆は
八十有余何ぞ六十に余りてるを生んやはに妖怪なること一個の老
翁と化して崖の下路をとゞめくとあるを来る行者又是を見るに同
くこの前の妖精なり大きに怒て口中に咒語を念へ土地の山神を
呼出しやらる此妖怪已に三度すでまりて吾師父をたぶらかす海
等空中に在て妖精を捉らしむるとなりれ眼神領すし空中に
ありて妖精を囲み住む孫行者今は心安しこと徒捧を振て

悟空

悟空還洞討殺獵人



かの老翁を一討に打殺せば一陣の霊光と化し四方に散して
亡失うせ行者徒捧突て三蔵に向て曰く師父今こそ妖
精と實に打殺せりちうよりて見るとゝ三蔵はじめ
馬とともに見るまでもなく一推の骸骨地に倒るゝ三蔵行者に
問て曰是いかもの何者ぞや行者の曰く渠原来倒て死し
たるものゝ霊魂ゆえ所よりつまりて妖をなせば吾に打まつる本相
をあらはしたり八戒ゝ悔ゝ師父行者のことを信じもよ
る渠三たび人を打殺しぬるとて師父の緊箍兒を喝して責
めることを恐れ法術をいろ〳〵屍をかく〳〵骸骨とは師父の眼を
掩ふものなり三蔵ゆえ八戒のことを信じ行者ゆゑ
叱〳〵ゆえ你今に至て兇性を改めず豈我徒弟とするに足て西天
に至り得んやとて故郷へ去るべし〳〵行者の曰く吾妖精を殺
さゝ師父の害を除きまつるに一個の獣子ゆゑ信じ我を
逐ひ給ふ何事ぞや抑我両界山を救ひ出されてより以来古
洞を穿ち你林に入り千辛萬苦して妖魔を除きしも年竟
鳥盡て弓藏を兎死て狗烹るとは世の諺もおのゝ含ぬ
とて三蔵行者の言説まして益腹怒を發し〳〵づから駁書を
写して行者に与て你喃〳〵云ことを止よ我再び你を以て徒弟
とせば西に向ひて立出まい行者今はせんすべなく沙悟浄に
て中なる是より往向り妖精あり師父を投んとせば你声を發し
て孫悟空といふる大徒弟あり師父をあやまらんかぶまら你等を罪
そべ〳〵こ呼べ〳〵千禽萬獣我名をよびかるゝ騒きさ

三藏看レ塔陷二妖魔窟

べしとて法螺貝を吹く觔斗雲に打のりて花果山へぞ帰りける

華果山群猴聚義　黒松林唐僧逢魔

孫行者氏時東洋大海をとおく遂に花果山に帰れば山中をとおく荒々たる峯倒る崖崩るむら〳〵見し山も草木に暫くあきれてなぐさむ如く坡の陰より七八個の小猿ころび出大聖に向ひてかく我等を見て逃げ行者問ふ曰く我暫く留まる内に何ぞ山中の荒たるぞ小猴共答へやうは近来大勢の猟人氏山へ〳〵狩く養猴と猟取り或は煎〳〵足を炙ひ或跳圈せてなぶさ〳〵と逃て一個の猿も頭をさし出すのは大聖憐れと聖きて見をくらはまへ行者曰て大きに怒り汝ら共に毒くおのれ吾氏猟人を

を磨ぎて你們を伐とむら〳〵逃て山の上なる砕石を積置猟人の来るを待ぬうりなに南の方より数千人の猟師鷹を居へ犬をさらせ羅網を張り花果山に臨んで押よせり悟空是をとり〳〵山の嶺に登られ咒を唱へ〳〵巽の方に向ひ一息氣と吐下もとに忽ち狂風吹起り那積貯の砕石雨あられとなりて猟人と討ぬ或は頭を討きくだき或は手を損じ先腸の者ども〳〵に帰りて逃走り悟空たもあらんと大きに笑ひ水簾洞の前に一個の大旗をとり〳〵十四個の大字を写し其書に曰

重修花果山復整水簾洞齊天大聖

さて後に玄奘三蔵は遂に心猿を放ち意馬に鞭ち西の方白

八戒
需食
勞眠
叢中
沙悟淨

虎嶺をすぎるに一個の松の林に入りぬ三藏腹中
飢に及び八戒をして齊飯をもとめしむ八戒釘鈀を提西向し
て十余里を馳るにいまだ一軒の家も臣草亡くと生茂りて人倫
絶る荒野なれば身體労ものの草窠に這入り万支放下おりぬ
侵睡をなるにても三藏は松林の中に在て八戒を待るかて後
沙僧に向ひて議しまつは八戒原是獸子何ものの処に行くると知る
べからず你ぢ行て引ぱれ来れ沙僧命をうけ寶杖をたづさへ同じ
く西に向く走り去りぬ三藏一人松林に座して待詫るに忽ち
南の方にあらわれ一座の寶塔あり三藏ふとおもひるは我東土
生れ西に至るに途に寺院廟塔あらば佛を拜し地を掃ふと誓
とせり両後方の陰る間に此塔をあらんとて行李と馬と其の如く

繫ぎ置かの塔門に入り見れば石床の上に臉青く猫のごとき牙生
たる妖魔よく寐入りていびきをかれば三藏大きに驚き身を轉して
逃出るを那妖魔目を開きて失庭にあらずして引とゝ你何國の
人なるや僧なるやと尋ねるに三藏大きに恐れ謹でやて曰く貧
僧は東土唐國の者天子の勅を蒙り西天に至り經をとらんとす
るものなり此寶塔をとるかに入りぬ妖魔の曰
你同行の者いくや三藏の曰く徒弟二人馬と行李は都に松林
の内にあり妖魔大きによろこび小妖をめして三藏を柱に縛
付させ渠が徒弟二人馬と共に我食物にあらんまもり門を閉
てかの徒弟が来るを待一連に吃ひ喫さんとてきびし
門を扇再び石上に睡をなる此時悟淨八十里斗りも進こ

波月洞
沙悟淨

妖魔猪沙
挑戰雲中

行に八戒が在所をたづいづくへゝ行くと岡に上りのぞきゐれば
叢の中に鼾の音を聞て悟淨あやしき草を開きて見ればいかの八戒ぶ中に打臥ゐて鼾入りゐ悟淨心怒り耳聯を掴み引起し女獣子師父の飢ゑをもかつゐんぞ家に在て眠りぬるやと引ゑゑ旧の松林へ入りゐれば馬と行李ハ在て師父ハ見へず悟淨大きに驚き師父ハいかゝや妖魔の為に食れゐ哉皆是你が獣子より来ぬ速やく行場をたづぬべしとて馬を牽て林を出南の方を見るに一個の寶塔かゝりに在八戒を らへて你ぞりに人を罵ることなかれ師父ハ必ず塔下に至り佛像を拜しゐ人ならんとて二人走りて塔門に至りゐれば門の扉緊く閉ぢ門上に碧子山波月洞と六字を彫り両人の徒為

たゝかゐ門を叩き吾師父をかへせくと叫びゐるにの妖魔太刀を提げ門をひらきて跳り出八戒悟淨両人と追つかへつ戦ふ

彷彿の色いまゞ見えぬ

脱難に流来國土　兼恩八戒轉山林

此時三藏ハ洞中に縛められ涙落ること雨のごゝ時に一人の美女洞の奥より出きたり三藏をとゝく供ゑ涙をとゞ問て曰く長老ハ是何人ぞや三藏答て曰吾大唐より西天に三ゝ經を需むる者なり你事を聞に及ひ殺さんと欲ばやく殺とゞしかの女の曰我ハ人を吃ゝ妖魔にあらず舊我家ハ家を去事三百余里主藏國とゝの國王ハ則我爺ゝなり我不幸にして十三年前此妖魔の

魔縛三藏
女解附書
三藏
百花差

なのにてくられまゝ婦うの妻のうとは一女一男を生て佐らき三命とる
かゝ〳〵ゝ吾今一個の計と設けて長老の命をとらひまつりとゞき
同我寶藏國へ書を持行吾が所よ在る事を父母に告げてゐる
いるとていそぐ〳〵書をうきゝゝ三藏に附屬〳〵縄を解く
藏をもゝ已られハ三藏爰の心地して涼く活命の恩を謝しかの
書ハかゝらゞ你の八の節に入せまつらせ你ゝくらゝなきをも待るべし
却いるゝ〳〵ゝ此如をのがれ出いんと向るべかの天女三藏を引く後
門に至り都く我に却まつせ去ばらく家に去のひておらせとて
身を回して前門に立出黄袍郎ゝぞく我ひと上く家に帰り
ゝとこゝ見れハ此ハ妖魔八戒悟淨と雲中に在く我ひるゝ渾
家の声を聞て両人を却ゝ河の中く流まり你何の急事有

てゝ我我ひを止めるぞや妻の曰く吾今不思議の夢をゐん
たり甚爰に依く郎君に説話あり我昔如雅時より心に一つの
願をゝ賢明ゝを得く一生を任せゝ偏に射ゝ一善事を
彼人と誓ゝうされゝて郎君のゝきのゝを得く常に楽
ゝ吾今に至て偽に弦を誓ゝとゝれゝゝ魅るゝ兵今爰の
内に一個の金甲神将ゝうゝひ誓ひに背く罪を責ゝひ脱に
劔をゝく斬ゝと見く爰ハゝゝゝゝ言るにゝゝゝも一人の和
尚傳ゝをゝくかゝゝたあり是將に妻ゝ誓を満ゝぐき期至し
ゝ郎君妻を愛ゝる事眞ゝゝゝゝ具ゝゝゝの備のいゝ止めと解免し
帰ゝゝゝゝ吾ゝ月仏せると甚くからんゝの妖魔笑く白ゝ
我何の時ゝ你ゝゝゝゝたゞいゝる事やある善となく悪とな

師與兩弟趣實象國

你が弟子なほどのことをぞく我これを聽ん唐僧とゆるさんと思で
你が父のまうしたべし女大きにろこび後門に走り行き三藏
に向ひて曰く長老你が命は既に救ひはるう我名は寶象國
王第三の公主百花羞とゆる今の書かまらべ偽つくるわれと
て終よ後門を開きて三藏をまねきまむ前門より妖魔大声を
上く呼ばわる你両人の僧我あくに恐るくにあらずといへども
渾家の命をひにようて唐僧と俱に四匹ばらしむるろ後門
に至く師父をたづねようと云終く向門をとじたり八戒悟淨
是を聞て大きにろこび馬を牽て向の後に至りうれば果て
荆棘の中より三藏一人走り出師徒三人互に恙なきを悅び
忙ぎ師父を馬よかきのせ道をいそぎて馳うる行ること三日を

ることを寶象國の王城に至りかの公主百花羞が書をさゝげて朝
廷に至りうれば國王三藏師徒と金階の下ようきまべ悅び開
きうる其書に曰く

不孝女百花羞頓首拜稟父王萬歲殿前賢三宮母后
宮下拙女幸托坤宮感激劬勞不能盡孝乃於十三年
前中秋夜賞玩月花不期一陣狂風閃出個金睛藍面
魔王將女擒住駕雲攜至深山被妖強占爲妾勉捱十
三年產下兩児盡是妖種論比貶壞人倫不當傳書玷
辱但恐女死之後不見分明適遇唐僧亦被妖怪擒住
是女設計放脫特托寄此片楮以表寸心伏望父王聖

八戒
沙悟淨

戒沙
變身
到波
月洞
三藏

悃遠遣上將至硫子山波月洞捉獲黄袍怪救女回朝
深為恩幸草々厠恭注陳不一

國王讀終く声を放く大きに歎きて文武の百官をすゝめきあつめ
誰か能波月洞に至く這妖精を捉へん群臣皆妖怪げ通力を畏て
一言の答るものなし國王三藏をちらくやゝきてやるハ我向へやるく
長老ハ唐より西天へ至り經をとゝむるなりとや所ろかくハ法二
力を以く妖魔を降し公主をとゝ助へ恩を感ぜ匿三藏
是を畏て答く曰く貪僧ハ只佛を信ぜる事を知て尊て法術
なし我ハ西天に至ると雖ども是より西方に至く流山幽谷数ぞき

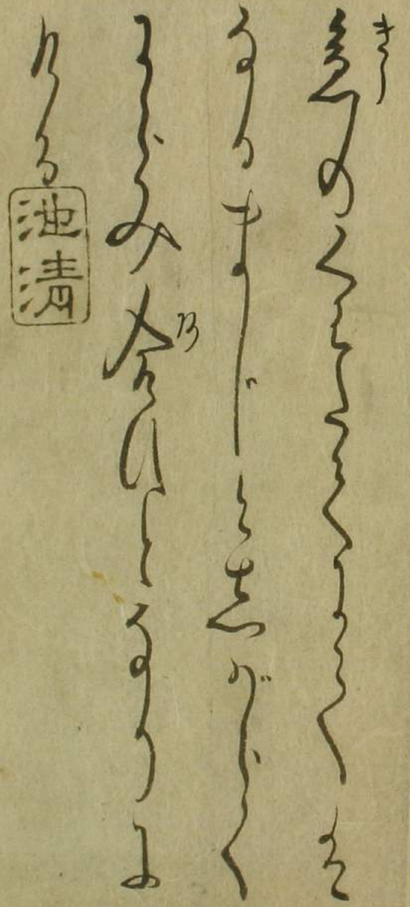
つゝみく悲妖魔の住波月洞に佛を拒ゝらん三藏の曰く
我二人の徒弟あり頗法術ありて我を守護ゝ我を免れ
難を免れん國王大きに喜ぶ八戒悟淨をちかくめゝ是
是を見る人尋常の人間にあらず國王先問く曰く二位の長老
よく妖魔を降す法術あるや八戒声を應じて答く曰く我よく魔
を降す術を知り家に知おく國王試に其変化を見ん事欲
とゝふ八戒忽く口中に咒文をとなへ一度身を動ゝ其身の長
八九丈尤石の羅臣驚くこと大方ならず悟淨もまた身を動ゝ
月ゝく脊高き人と変じ両人互に相謂て曰くいざ是より波月洞
にいとうかの妖精を拿へ来らんと云とおもへハ忽まち一叢の雲
を去ゝ八戒ハ釘鈀を提げ悟淨ハ寶杖を携へ雲に乗ぶり

空中を一筋に飛月のごと駆行る

池清

繪本西遊記初編巻之十終

池清



池清

池清